

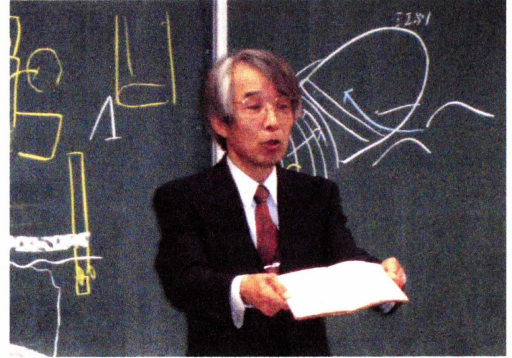


昭和 20 年代の手稲の姿と少年期の思い出

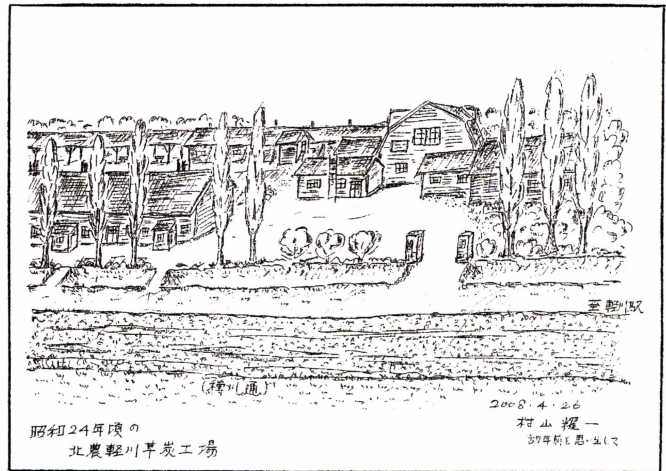
石狩市郷土史研究会
会長 村山耀一

講演は、「樽川通」所在地の地形の地質的特徴から始まり、手稲地区の開拓の歴史、そして講師の少年期の生活、とグローバルな内容からプライベートなことへと系統的に進められました。この手稲の土地の物理的環境と先住の人たちの生活の様子、そして数十年前の少年の生活を、非常に興味深く拝聴することができました。

ここに、紙面の都合により、講演の項目を箇条書きに記述させていただきますので、詳細は講師が準備してくださいました資料を参照してください。



- ・ 石狩・手稲地区の地質的特徴
- ・ 軽川地区への入植
- ・ 開進社による開墾
- ・ 樽川通沿いに排水溝掘り
- ・ 前田農場創立
- ・ 久木一族入植
- ・ 下手稲土功排水溝竣工
- ・ 稲山通認定
- ・ 昭和 25 年頃の「樽川通」沿いの住民
- ・ 農軽川草炭工場の長屋
- ・ 村山北舟の俳句集「緋衣」について
- ・ 少年時代の生活（食・住・遊び）
- ・ 少年時代の学友・その後
- ・ 開進社のその後（広報 小田記）



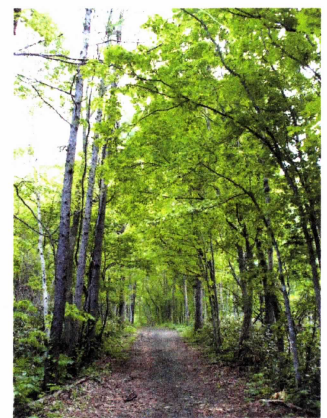
手稲山を散策

浜谷さんのお話を聞き、写真の花々を見ているうち山歩きがしたくなり、某日、友人 2 人を誘って手稲山の「カッコウの森」を散策してきました。



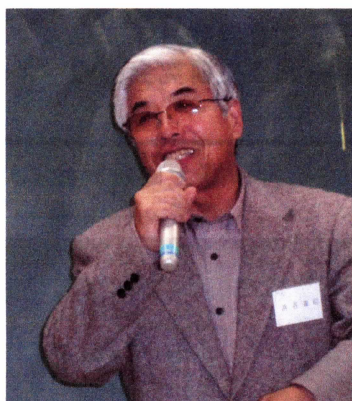
染まってしまいそうな新緑の中で可憐なニリンソウを見つけて感動したり、数本の巨木が、おそらくは台風の一瞬の突風で根こそぎ倒れ、そこから若木がまっすぐに伸びている様を見て自然界のたくましさを感じたり楽しい一日でした。

途中、エゾサンショウウオが生息する池が涸れていて、その姿がないことが気になりました。（広報 高木記）



次回研究会のお知らせ

次回（7月9日）は、上野秀一氏（札幌市埋蔵文化センター埋蔵文化課長）の講話「手稲の縄文人らはどこに？ 石器・土器・人骨」と 篠野雄一氏の会員発表「手稲・銭函の道路史」を予定しております。



『手稲山に咲く花』の発刊について、お話をさせていただきますが、この手稲郷土史研究会会員の中にも、これに携わった方がおられます。三国勲さん、立花顕次さん、田邊斉さんです。

これを作るに至った切っ掛けは、当時の健康福祉センターの後藤係長からの依頼によるものです。「南区には自然を紹介する冊子があったのだが、手稲区にはそれが無い。健康づくりに役立てるために、山野散策に関心を持たせるような冊子を作ってほしい」との話から始まりました。

まずは、人集めから始まりました。しかし、山頂で声をかけてみますと、植物等に詳しい方であっても、手稲在住でない人が殆どでした。

そこで、麓で集めることにして、西線道路付近で声をかけてお願いしました。2ヶ月ほどかけて人集めを行い、「やまなみ手稲」という名前で会が発足しました。月2回の会合を行いながら編集業務を進めてきましたが、素人集団ですので、例えば写真撮影ひとつとりましても、そのアングル・構図など、分からないことばかりで、苦勞の多い取材作業でした。

この冊子の46ページの記事は田邊さんの記述、表紙の写真は野邊地さんの撮影によるものです。

今、この続編を企画中です。草木・山菜などを紹介する内容で考えているところです。

手稲山にもミズバショウが咲いているという話で終わりにします。それは、平和の滝から登る登山道路の山頂付近で、道路から30mほどそれたところになりますが、手稲界限では、一番遅い時期（6月中旬）に観賞できるのではないかと思います。このミズバショウ観賞を含め、手稲山を散策したいという方がおられましたら、ご案内いたします。声を掛けて下さい。（広報 小田記）

会員研究発表

「手稲山に咲く花」を聴講して

定例会に出席した全員に、オールカラーの写真冊子「手稲山に咲く花」が配られました。浜谷会員は「やまなみ手稲」のメンバーです。この冊子を見ていると皆さんの山を愛する気持ちがひしひしと伝わってきます。

また浜谷さんのお話はユーモアに溢れていてたいへん面白いものでした。まずはメンバー集め→手稲山を歩いている人が手稲区の人とは限らない→その人の後をつける→「橋」まで来たら〈しめしめ〉そこで声をかける→フラれる→めげずに繰り返す。

そして花を美しく撮るため写真の勉強。この冊子はそんな努力の結晶です。

（広報 高木記）

4月にお願した愛読書アンケートについて

会員のみなさんが予想通り文学に精通した方ばかりだということが判りました。

作品名は省きますが、和書では夏目漱石、井伏鱒二、山本有三、大佛次郎、石板洋次郎、山岡荘八、遠藤周作、司馬遼太郎、高橋和己、三島由紀夫、五木寛之。

洋書ではトルストイ、ドストエフスキー、カフカ、ロマン・ロラン、サンテグジュペリ、レイモン・ラディゲなどの名前が挙がりました。

他に、大ブリテンヒストリー（原書）、落語、聖書などみなさんの博学ぶりが目につきました。こ

鈴木清士当会事務局長が自分史「黒い川」を刊行

確かに鈴木さん本人の体験なので、自分史には違いないのですが、写真、構成の精度の高さからいってもこれは正しく歴史書です。逃避行の場面では、自分の鼓動が聞こえるほどドキドキしました。若い人にこそ読んでほしい1冊です。

んなに文学愛好家が多いなら、たまにそんな講師もいかなと思いました。

茂内先生が幼少の頃読まれたという「野球少年」「宝島」「冒険王」……。

活字を食べて育った人は、やがて知識を与える立場に立つものなのだと納得しました。